

【討論会】 ワールドカフェ方式による話し合い

ファシリテーター

NPO 法人 地域交流センター津屋崎ブランチ

木村 航氏

部屋にはテーブルクロスのかかった 4 人掛けのテーブルが 13 組用意され、その上にお茶とお菓子、4 本のカラフルなマジックペンがセットされ、BGM も流れています。そこへ 52 名のお客様が見え、各テーブルに着席しました。

こんにちは。木村と申します。ファシリテーターとご紹介いただきましたが、日本語に直すと進行役ということです。この場の皆さんが、ざっくばらんにお話し合い出来る空気づくりというか、場づくり、時間の進行などのお手伝いをいたします。

この場に集まっておられる皆さんは文化ボランティアに携わっている方々で、普段はなかなか顔を合わせることはありません。また幅広い分野の方が集まっていっぱいます。今回のフォーラムの目的の一つは、皆さんが日頃現場で思っていること、感じていることなどの意見を交換し合い、語り合うことと聞いております。

さて、本日はどのような方がここにご出席されているか聞いてみましょう。

大学生の方？ 1 割ぐらいですね。美術館・博物館・施設の職員の方？ 2 割ぐらいでしょうか。文化ボランティアに携わっている方？ 4 割余りです。行政の職員の方？ 1 割ちょっと。どこにも所属していない方で興味をお持ちでこられた方？ 若干名いらっしゃいますね。

このように多種多様な分野の方が参加されています。今回は、多くの皆さんで話せる方法、ワールドカフェという手法で進めてまいりたいと思います。

話に入る前に、まずテーブルに着いているメンバー同士で、名前、所属先、本日ここに来られた理由など、簡単に 5 分位で自己紹介をお願いします。

【各テーブルにて自己紹介始まる】

【5 分後】

そろそろ 5 分経ちましたが、このような形がワールドカフェの基本的なものと思ってください。つまり全員が話すことです。全員が話すとして、一人一人が 5 0 数人に向かって話すことはかなり緊張してしまいます。人は 7 人以上の人に話す時は公式見解しか述べないという統計があります。そこで 4～5 人位だと本音で話せる、つまり思っていることを言える雰囲気では話ができるということです。これから私が、次のことについて話してくださいと申し上げます。これを「発問」と言います。各テーブルでそのことについて話してみてください。ワールドカフェというのは少ない人数がテーブルを囲み、好きなものを飲んだり甘いものを摘みながら、あたかもカフェにいるかのような雰囲気の中で、ざっくばらんに話を交わす所です。

ワールドとは、この会場全体を「世界」と見立てています。今皆さんが座っているテー

ブルが13セットあるということは13の国があるということです。これがワールドです。

私がテーマを一つ出します。そのテーマに基づいて各国ごとに話をしましょう。各国にはそれぞれの文化があり言語もあります。個性豊かな皆さんのお国の話をしてください。

ある程度時間が経ったら私の方から「席替えをしてください」と言います。それぞれの国の人が別れて旅に出てください。世界旅行をしてもらいます。そこで旅人は他所の国に行って他の国からやってきた旅人と「自分の国ではこのようなことを話していましたよ」「あなたの国ではどのような話をしていましたか」というように情報交換をしてください。そして各地を旅して最後は、また自分の国に戻ってきます。そこで自分の国の同胞と「やー、久しぶり」と言って、「私が旅した国々ではこんな話がありましたよ」という形で経験したこと聞いたことなど、情報交換し話し合うことで、世界全体のいろいろな話や経験を混ぜ合わせることが出来るという事、これがワールドカフェのワールドという部分です。

そこで皆さんはこれから、あるテーマについて話しながら旅を重ねて、いろいろなことを知見し経験していくことになりますが、どこのレストラン、喫茶店にも「こんなふうに振舞ってください」という暗黙の作法があるように、このワールドカフェにも少しだけエチケットというものを提案いたします。「話すときはこんなふうにしてください」というお願いです。

- ① 「あなたの知識と経験に基づいて参加してください」という事です。これから申し上げるテーマも、そう難しいことではないので皆さん普段通り感じている事、今まで経験した事を話してください。その時、このワールドカフェの主役は今テーブルに座っている皆さんです。一人一人が話に参加することでワールドカフェは盛り上がってきます。
- ② 「よく理解するためによく聞きましょう」このワールドカフェでは、なるべくありのまま聞いてください。これは結構難しいことです。大抵の人は話を聞くととき解釈をします「これはこういうことだろう!」と。反対意見が出ると「ちょ、ちょっと!それは違うだろう!」と間に割って入ったり、間違いを指摘したくなったりします。今回はありのままを聞く「あっ、そうですか!」「なるほどですね!」というふうに。それから「私はこういう意見があるのですが」ということで、相手が言ってくれた意見の横に自分の意見を並べるような形で話を進めていきます。
- ③ 意見が違う時はその違いを楽しみ、いろいろな立場の人、幅広い年齢の方がいらっしやるので勘違いしていることや、経験の差があるかもしれません。ただこの差は「面白いネー」という形で違いを歓迎することにします。そして落書きをします。書きながら話しましょう。

今テーブルの上に敷いてある紙はテーブルクロスです。またテーブルの上にはマーカーがあります。皆さん一人一人がこれをとって話をしながら書いてください。

話を聞いていて良いことを思いついたが今話せない時、テーブルクロスの上に落書きをして残して下さい。

これから皆さんはどんどん旅に出ます。旅をした時に、皆さんがテーブルクロスに書いたものを、次にやって来た旅人は、「あー、この国ではこんなことが話されていたの

だ」ということで、すぐ判ります。もしテーブルクロスに何も書いてないと旅人は、ここでは沈黙が支配していたのだと思い、その国での状況が全く判りません。自分のため、また次にやってくる旅人の為に書きながら話して下さい。議事録ではないので誰か一人書いたらその人に任せるということではなく、あなたが感じていることをテーブルクロスに表現してください。書きながら話すことは最初難しいかもしれませんが慣れてくると絵を描いたりして結構楽しいものです。ここは書きながら話す「遊びごころ」を盛り込んでカラフルな文字等で楽しみましょう。そして先程お願いした話し合いのエチケットを頭に入れながら話をして頂きたいと思います。

では、発問を申し上げます。テーブルクロスの真ん中に書いてください。
皆さんが「これまでに関わってきたボランティア活動で、もっとも心が動かされたことは何でしょうか？」では皆さん、ご自由に語り合ってください

〔各国において、話し合いが始まる〕

【20 分後】

ありがとうございます。今 20 分経ちました。では皆さんはこれから 1 回目の旅に出ていただきたいと思います。

先ずそれぞれのテーブルで、旅に出ず残る人（ホスト役）を一人決めてください。決め方にルールはありません。ホストは、やってきた旅人に「この国ではこんなことが話題になりましたよ」と伝える役割を果たしてください。総て逐一報告する必要はありません。旅人もそれぞれ心の中でいいなあーと思ったこと、印象に残っていることを報告してください。報告し終わったらまたテーマの 皆さんが「これまでに関わってきたボランティア活動で、もっとも心が動かされたことは何でしょうか？」について話してください。旅先で話を聞いて思い出すことがあるかも知れません。旅先で新しく出会った仲間と、問いを深めていただけたらと思います。ではお国を旅立ちましょう。

〔ホームを離れ第 1 回目の旅に出る。そこで話し合い〕

【10 分後】

有難うございます。

旅立ちで多彩なことを交換してもらっていますが、ここで話題提供ということで、直方谷尾美術館の学芸員中込潤さんにお話をしただけたらと思います。8 年前から子供のための美術館を立ち上げて、こどもスタッフ（子供学芸員）を育成されていることや、中込さんご自身が体験されたこと等お話いただきます。ではよろしくお願いします。

〔中込 潤氏 話題提供 約 20 分間〕

中込氏 話題提供（本文） 次ページに別途掲載

中込さん、有難うございました。皆さんワールドカフェの話し合いの途中でしたが、話題提供していただきました。皆さんが話し合ってきた中に、今の具体的な事例を重ねて頂きたと思います。質問もおありかと思いますが、ワールドカフェの後にしたいと思います。それでは、話題提供頂き、皆さんはどのようなことを感じたか、各テーブルで話しを続けて頂きたいと思います。幸運にも中込さんと同じテーブルの方はラッキーな方ですね。いろいろ質問してみてください。

ではここでワールドカフェに戻りますが、ここで少しテーマを変えてみたいと思います。各テーブルの真ん中に書いてください。「今までの話から何が見えてきたか。其々の仕事や活動に活かせるとしたらどのようなことですか？」今のテーブルで中込さんの講演の感動から始めてください。10分後に声をかけます。

【10 分後】

今度はもう1回旅をします。ホストの方はそのまま残って新しく来られる客を迎えてください。他の方はまた新しい国へ旅に出てください。

〔2 回目の旅に、また新しい出会いがありました〕

【20 分後】

もう3時を回りました。「ふくおか文化ボランティアフォーラム 2012」のワールドカフェもそろそろ終りを迎えようとしています。みなさんは旅先の空の下にいますが、そろそろ元いたお国へ戻って頂きます。そこで其々が得た知見、新しく出てきた疑問、新たに湧いた感想等をお国の仲間に報告してください。そしてもう1度「今までの旅で何が見えてきたか、これまでの話で其々が仕事や活動に活かせるとしたら何か」を、最後に確かめてみましょう。では皆さん自分のお国へ帰りましょう。

皆さん、自分の国（最初座ったテーブル）へ帰り、旅での出来事を話しています。

では皆さん、テーブル毎の話は終わりにしたいと思います。少し休憩をとってから本日のワールドカフェ、フォーラムでどんなことが起きていたのかということを共有する時間にしたいと思います。その後、コメンテーター古賀弥生さんも含めて全体のまとめの時間を過ごしたいと思います。

話題提供

「元氣は伝染する？」

直方谷尾美術館 学芸員

中込 潤氏

ご紹介頂きました直方谷尾美術館で学芸員をしております中込と申します。

先ほどもそのテーブルで皆さんと色々話す中で出ていましたが、「子供のボランティアが増えていくのか」という話がありました。実際直方谷尾美術館では子供のボランティアを8年前からやっております。そこで、どのような活動をしているのか、話題提供という形で、少しご紹介したいと思っております。

(パワーポイントによる映像を見ながら)

こちらの写真は浜辺にゲルが建っています。これが来年の1月から谷尾美術館でやる展覧会のポスター用に撮影した写真です。芦屋海岸で撮ったもので、撮影したのは私たち職員と、子供スタッフと呼ばれる子供のボランティアと一緒に写真をとりに行きました。(次の写真)こちらは子供スタッフで、ゲルを組み立てている様子です。これを見てわかるように本物のゲルとはちょっと違います。素材が竹で出来ています。(次の写真)これは市内の竹林です。子供スタッフのおじちゃんやお父さん方に協力していただき、この竹を切り出しました。非常に急坂な所だったので子供達が入るにはちょっと危険だということで協力して頂き伐採しました。(次の写真)その竹を用いて、釘は使わずいろいろな紐で縛ってゲルを作りました。骨組みを子供スタッフが中心となって作っています。その時人手が要るということで、保護者の方にも来て頂き手伝ってもらいましたが、保護者の方は殆どが見守るだけ、子供達で骨組み自体を作りました。

それから保護者以外にも「サポートスタッフ」という役割があります。これは子供達の活動を陰で支える大人のメンバーです。こちらと同時に募集し活動してもらっています。(次の写真)こちらはゲルにかける布ですね。この布はいらなくなったシーツをいろいろな方から頂いたもので、それを縫い合わせてゲルの幕にしています。これも学校の先生方が美術館に研修に来られたときにちょっと手伝って頂きました。もちろん子供達で出来る部分はしっかりやり幕を作っています。(次の写真)これは河川敷で組み立てた時の様子です。

この「子供スタッフ」は、今年は小学校3年生から5年生、男女合わせて15名います。学年も集まった学校もバラバラで市内だけでなく市外からも来ています。この「子供スタッフ」は毎年春、美術館が「子供スタッフ・子供ボランティアとして美術館で活動しませんか？」というチラシを市内の小・中学校に配ります。また当美術館は財団が運営しますので、その財団が発行するフリーペーパーにも募集案内を掲載し、市外にも宣伝しています、そういった情報を発信して、集まった子供達です。

(次の写真) この子供スタッフの目的は、毎年1月から3月に行われる展覧会を、これまで「子供のための美術館」という題名をつけていましたが、その展覧会の準備をするためのボランティアスタッフということで集まってきています。(次の写真) この展覧会を催すための準備期間は4月～5月で募集して6月～12月末までかけて準備を行います。

基本的にはこれまで美術館の収蔵品の中から子供達が絵を選び出して、それに子供達なりの解説をつけるなど、他にも作家と連絡をつけて、いろいろなやり取りをしながら工夫しながら行ってきました。そして今年はちょっと趣向を変えたいと思い、先ほど見ていただいたゲルですね。展覧会を準備するという部分では変わらないのですが、このゲルを活動のシンボルとして、いろいろな人たちと交流しようということが今年の大きな目的となっています。

(次の写真) 例えば、これはネパールやベトナムの留学生たちと交流している様子です。こちらは河川敷にゲルを建てその中でいろんなお話を聞いたり、お互いに国の遊びを教え合ったりしています。

(次の写真) こちらは市内の老人ホームで交流をしている様子です。市内の介護付き老人ホームにゲルを持って行き、そこで展覧会をしました。これは先ほど言いましたが、子供達が美術館の収蔵品の中からおじいちゃんおばあちゃんに見せる絵はどれにしようかと選んで、その横に自分達なりの解説をつけ、さらにおじいちゃんおばあちゃんに宛のメッセージもつけ展覧会を開きました。これは今も老人ホームに展示中です。先ほどの写真は入居者の皆さんとギャラリートークをしているところです。

お客さんを前にお話をするということを、毎年行ってきましたが、今年のメンバーは初めてたくさんの人を前にギャラリートークをしたので、リハーサル時に女の子が2人、あまりの緊張と不安で、泣き出してしまいました。それでも頑張って本番では本当に堂々と発表してくれました。その女の子にとってすごく自信になったのではないかと思います。

これは施設の中にゲルを建て、その中で子供達が用意した魚釣りゲームを入居者の皆さんと一緒に楽しんでいるところです。この魚や竿も色々工夫して作りました。たくさん入居者がいらっしゃるのですが、得点をつけて上位の方には子供達が描いた絵をプレゼントするというようなことでも楽しみました。

(次の写真) この老人ホームの展覧会に至るまでの過程は、ただ急に企画を持っていったと言う訳ではなく、事前に老人ホームの方に来て頂いて、「こういう場所ですよ」また「こういう事をお願いしたいのだが」と云うようなお話を聞くことから始めました。(次の写真) 実際、子供達が老人ホームに行って、どのような生活をされているのかということも調べました。例えばこれは「このようなお風呂に入っているのですよ」と体験しているところです。また車椅子体験や他にもいろいろな体験をさせていただいています。

(次の写真) こちらは老人ホームで敬老会があった時に、実際子供達も敬老会に参加して歌のプレゼントをしているところです。その後、食事と一緒にしました。こういった形で実際に入居者の方たちと接点を広く持つことで、例えば先ほどの魚釣りゲームもそうですが、目の不自由な人ができることは何だろうとか、車椅子に乗ったまま楽しめることはどんなことがあるのだろうかとか、そういったことを実際にこのような交流を重ねることで子供達が考えながら作ったゲームになります。

(次の写真) 活動の内容についてはこんな形でワイワイ言いながら子供達で話し合って決定します。先ほども言いましたが重要な役割をするのが「サポートスタッフ」です。子供達

の活動をサポートしてくれている方で、その「サポートスタッフ」の中には、元「子供スタッフ」が高校生になってサポート役に回っているケースもあります。そのサポートスタッフの主な役割は、子供の声を聞くことです。子供の側にいて、「そのアイデアいいね」とか、「面白い」「その発言しっかりメモしておいてね」とか、そういった形で子供達の何気ない会話の中から活動に活かせるような言葉を拾い上げていきます。

(次の写真) これは絵を選び出しています。これはアートカードといって収蔵品のカードがいっぱいあり、その中から選んだものを実際に今度は絵を倉庫から出してきて、見て、それに解説を付けていくのです。(次の写真) これは今年の一月になりますが、昨年度のギャラリートークの様子です。このような感じで、手前にも一般のお客さんがいらっしゃるのですが、その中で解説をしているところです。美術館の解説ボランティアという役割になるのですが、これも実際短い準備期間で練習も十分にはできなかったのですが自分達で用意した展覧会なので凄く一所懸命解説をしています。(次の写真) あとこのギャラリートークの時ですが、毎年サプライズというか、作家が実際に子供達のトークを聞きに来て、そして子供達と交流する場面があります。これは本当に子供達にとって大きな思い出となっています。

(次の写真) 子供スタッフの活動とは自分達が考えた展覧会をするだけでなく、時には地域の要望に応える形の活動もしています。写真は地元商店街のアーケードに掲げた子供スタッフ達の作品です。「ビッグフラッグ」と呼んでいます、これは一昨年写真です。去年の写真も用意しましたが、人通りが少なくあまりにも閑散として寂しいので一昨年ものを使わせていただきました。このようにアーケードに吊り下げるというイベントは今年も商店街から要望がありました。今度、直方の駅が取り壊されて新しくなり、その横に新しい病院ができました。そこで商店街が病院と連携していきたいということで、「新しく病院が開設されたことがわかるような絵を描いて欲しい」という要望があり、大きな絵を今年も描いています。

このような依頼をしていただいた商店街の理事長さんは非常にアイディアマンで、「今年のクリスマスには大きなハリボテの人形を吊り下げたい」という依頼を受けて、今準備しているところです。他にもこれまでに風鈴に絵を描いて商店街に飾りました。色々な企画を考え、子供スタッフに活動の場を与えています。嬉しいことに子供達の働きに対していつも労いの言葉を忘れずにかけてくれます。他にも言葉だけではなく活動中にアイスクリームやジュース等差し入れてくれたり、「ありがとう」とお礼に小さなキーホルダーをくれたり、いろいろな形で応援してもらっています。理事長さんは、「商店街からでるこうした活動費は、みんなで飲んでしまえばあっという間に無くなってそれでおしまい。だったら未来のある子供達に使いたい」「町を元気にしようと云うこうした取り組み、そして子供達の絵は商店街に来る人の心に何か残していると思う」「何より子供達が活動する様子を見て私たちが元気を貰う」このように言われています。

(次の写真) これは成人式の舞台の様子です。3年前から、飾る垂れ幕こちら子供スタッフが描いています。これも商店街の「ビッグフラッグ」を見て市の担当職員の方から声を

かけていただきました。中央にいるのは子供スタッフの代表です。成人式でお祝いの挨拶をしているところです。

ある時、「あんたのところの美術館は、子供の活動はようやりようけど、大人のはせんのか」と不満があるようなことを言われましたので、それでは、と大人も同じような企画をやることにしました。昨年直方谷尾美術館が新しく市立美術館になって 10 周年を迎えましたので、それを機会に 10 周年記念展を、実は大人のボランティアスタッフを募集して開催しました。これは郷土ゆかりの作家、山喜多二郎太という方ですが、その方の調査から図録作りまで其々得意分野を活かして作っていきました。(次の写真) その得意分野というのは例えば地域の広報の記事を書いている方は作家のインタビューをお手伝いして頂いたり、メンバーの中のプロのカメラマンの方には、その方の指示で皆アシスタントをしながら撮影を、あと旅行好きの方には遠方の山喜多二郎太の関連資料の撮影をして頂いたりといった形で美術館側としては全く予期していなかった展開で準備が進んでいきました。その他にも展覧会が始まってから、休憩室を喫茶室にしようということで「カフェ・二郎太」という無料喫茶室を作って、来館者におもてなしを致しました。これはすごく話が弾んで、お客様も満足して帰られました。

みなさんにお配りした資料には、実際にこのボランティアに参加された安田さんという方の文章が載っていますので、もしお時間があれば読んでいただきたいと思います。

またこういう展覧会では、ギャラリートークを学芸員がするのですが、何回かやっているうち、最終日のギャラリートーク丁度その日に私の母の葬儀が入ってしまいました。中止にしないとだめかなと思っていたところ、「じゃあ私たちでやるよ」という電話を貰い、そのボランティアさんにギャラリートークをお願いしたことがあります。それがあとで聞くとすごく評判が良かったのです。僕より話が上手だったということで、最初からやってもらえばよかったかな、と思いました。

(次の写真) 最後にこれは今年の展覧会の子供スタッフの様子ですが、去年は九州産業大学の学生さん達と長期にわたって交流しながら展覧会を準備しました。これは展覧会の成果を大学生の皆さんが見に来てくれた時記念撮影をしたものですが、こういう子供や大人のボランティアの皆さんに、美術館はいつも支えられているなというふうに感じています。それは人手が足りないから助かっているということでは無く、ボランティアさんが地域と美術館や、人と人を結びつけてくれているということをすごく感じて、「**元氣は伝染する**」というふうに題名をつけていますが、本当にそれに関わった人達というのは、その元氣が必ず伝染しているなと感じています。

それは老人ホームの入居者の方々の表情とか、「カフェ・二郎太」から出てきたお客さんの笑顔からも頷けます。その表情や笑顔を見ればすごく感じるし、その発信源はボランティアさんの元氣だと思っています。

ではそのボランティアさんの元氣ってどこから来るのだろうと考えた時に、一つ思い当たったのは、常に“クリエイティブでいること”ではないかなと今感じています。何か面白いことをしよう、新しい発見をしようという自ら考え、生み出していく姿勢が元氣の

源ではないかと思っています。同時に、実際私達がボランティアさんと一緒に活動することが、僕自身がいつも「ああ何か面白いことをしよう」と考えているということは、そういう勇気を貰っているからという感じです。

気がつけば、自分達が一番『元気に感染している』のではないかと思っている次第です。

以上です。

◇ 全体のまとめ

○ファシリテーターのとりまとめ

NPO 法人 地域交流センター津屋崎ランチ 木村 航氏

各テーブルから出された意見や想い、またメンバーが交代することで
得られた新たな気づきについて、全体で共有します。

では皆さま、共有の時間に入りたいと思います。まずはワールドカフェで何が話されていたのか、フォーラム全体として何が起きていたのか、ということを皆さんに確認いただく時間を前半に持ち、其の後で古賀弥生さんにコメントを頂けたらと思います。

各テーブルで、また個人がどのようなことを感じたかを発表してください。全テーブルが発表するには時間が足りないかもしれませんが、言葉にすることで誠意が伝わることもありますので是非皆さん積極的に参加して下さい。

「参加者テーブルごとの発表」

A テーブル：最初のテーマは、「今までボランティア活動をして、最も心を動かされたこと」でした。多分どこのテーブルでも出たことと思いますが、やはり自分たちのボランティア活動によって、お客様から感謝の言葉を頂いた時が一番感動します、という方が大半でした。それと、本日のフォーラムで最初の報告「アンケート調査から見えたもの」の中で、世代交代が課題の一つとして出ていましたが、先ほど谷尾美術館中込氏の話の中で子供のボランティア活動という話を聞いた時、我々はどうしても若い世代に期待しがちですが、その点、谷尾美術館では子どもさんを上手く使って・・・と、言ったら語弊があるかもしれませんが、子供さんと一緒にボランティア活動をすることで、子どもの時代からボランティア精神を体験し、その子が学生になり大人になってもそのまま活動されているというお話がありました。私達もそういう面では内容にもよりますが、やはり子ども達にも目を向けていく必要があるのではないかと、私達のテーブルでは話題になりました。またそれに関連して、親も自分の子どもが活動しているとなれば、そのご両親なり兄弟は大なり小なり関心を持つのではないかと思うので、これからは子ども達にも目を向けてもいいのではないかということが、見えてきたことのひとつと感じました。以上です。

木村：ありがとうございます。心動かされたことは、やはりお客様から感謝されたとき

一番心が動いたよ、ということが多くの方が話されていたことですね。それから世代交代も課題の一つと言っていましたが、今まで若い世代若い世代と望んでいたけれども、中込さんの話を聞いて、あー、子どもの頃から一緒にボランティアをする、そうすることで彼らが成長してボランティアの担い手となって、そういう形で世代交代が行われていくのだなということに気づいたと言っていただきました。ありがとうございます。このような形で次の方をお願いします。

B テーブル：こんにちは。本日はこのような会合にお招きいただきありがとうございます。いろいろ勉強になりました。九州歴史資料館でボランティアを担当しております。その中で一つ解決できたことと、解決できなかった、というより謎が深まったことがあります。まず一つ解決できたことは、さまざまな活動のやりかたですね。それについていろいろな取り組みをされていて具体的にこういうことをしたらこういう結果がでたのだよ、という話をたくさん頂けた事、その取り組み方法についていろいろと多くの方から答えて頂けたことが非常に良かったと思っています。

しかし一つどうしても解決しなかったのが、「そもそもボランティアとは何ぞや」というところがやはりなかなか出てこないなと思いました。そのなかでも例えば市民で立ち上げられた自主的なボランティアと、行政側が募集したボランティアとは果たして同列に考えて、ボランティアと括って良いのかと言うことです。そういうところを考える時、「ボランティアってなんだろう」と、僕は尚更わからなくなりました。

またいろいろ活動を重ねながら自分なりの答えを見つけていきたいと思いますが、もし皆様の方で私が後から投げかけた答えについて何らかの見解をお持ちの方がおいでしたら聞かせて頂きたいと思い、手を上げました。以上でございます。

木村：ありがとうございます。新しい問いが生まれてきましたね。解決できたことは多くの取り組みを知ることができた、ということでもよろしいですね。そして新しく湧いてきた問いは、そもそも「ボランティアとは何ぞや」ということですね。如何ですかね。この投げかけに答えるような形でも結構ですし、ご自分がワールドカフェで話していたことをそのまま言って頂いても構いません。よろしくお願いします。

C テーブル：今日は本当にありがとうございました。アクロスの岡野といいます。非常にいろいろなことで幅広い話を聞けて良かったと思います。今、解決できなかった事と云うことで言われた「そもそもボランティアとは何ぞや」ということ、それについて今日皆さんと話した中で私なりの感想なのですが、じゃあボランティアとアルバイトはどう違うのかということ考えた時に、やはりボランティアで参加するということは、何か自分が持っている知識やノウハウ これを周りの人に伝えていく、例えば宗像市の方では、歴史案内のボランティアをするというようなこと、そういったボランティアをすることで自分の生き甲斐として持っていたと思うのではないのでしょうか。

あるいはアクロスではとびうめの会ボランティアの皆さんに、コンサート開催時いろいろご協力をお願いしています。当然アルバイトを頼む時もあれば、とびうめの会にお願いする時もあります。とびうめの会の方が音楽の好きな方であれば音楽を途中で聴いてもらっても全然構わないので、そういったことで少しでも自分の芸術を磨くとか、そういった楽しみをもってもらうと単なる報酬を貰うためにやるのではなく、そこに生き甲斐なり自分の楽しみを持てるということ、それがアルバイトとボランティアの違いなのかなということと、逆に私たち来てもらう側もそのボランティアの方々、単なる仕事だけで来てもらうのではなく、どういった楽しみをもって貰うかというところを、お願いする側としても考えなければならないのではないか、このあたりを今後勉強していきたいと思いました。

木村；ありがとうございます。意見があるようですね、どうぞ

D テーブル：私も少し疑問を持ちました。と云いますのはアンケート調査用紙がきました時に、見てみますと何でも無い、無い、無い、の質問と、ああして欲しいこうして欲しいという事ばかりの質問状じゃなかったかしらと思っております。それを見ましたときに「ボランティアって何だろう」という気がいたしまして、こんな会合だったら行くのを止めようかなと実際思ったことでした。恐らく大きな施設のボランティアをされている方々のご意見が多かったのではないかと思っております。

私どもボランティアは小さなグループで始めて 20 年余り活動しておりますが、10 年ぐらいしてなんとなく市から認めてもらい、今では部屋代を助成してもらうとか少しずつ協力を頂き何とか上手くやっております。それまでの 10 年余りというのは勉強するにも全部自分達でお金を出してやりました。大きな施設のボランティアをされている方は、研修などでは講師の先生も呼んで貰い黙って聞いてそれで勉強する、それはそれでいいと思いますけど、ボランティアのアンケートの結果を見ましたときに、私達のボランティアと 생각이少し違うのではないかと思います。

ただ単純にボランティアということを考えた時に、今日皆さんのご意見を色々お聞きして、生き甲斐を感じたとか、これからの子供さんと楽しく過ごせるとか、そういう単純な感じで過ごしてもそれはそれでいいのかなという気は受けております。まだ疑問点というのも沢山持っておりますけど、私も今後の活動の中でまた勉強させていただこうと思って今日は参加しました。ありがとうございました。

木村：ありがとうございます。「ボランティアとは何ぞや」という問いに対して二つ、意見なり、こう考えるという話が出たと思います。一つはアルバイトと比べてみるとどうなるのかという話ですね。お金を得たりすることがあるかもしれないけどボランティアは知識ノウハウを伝えることでそこにやりがいを見出す、ここがアルバイトとの違いじゃない

かと。行政としてボランティアをお願いするときに、やりがいという観点をどういうふうに見出していくか、ということが課題なのではないか、という気づきも合わせて発表いただきました。ありがとうございます。それから、アンケートをみて自分達がやってきたボランティアと何か違うような気がする、果たしてどうだったのだろうかというような感想も寄せていただきました。自分達でお金を出す、これがボランティアという感覚だった。それに比べて何か与えられるというボランティアのあり方に疑問をもった、ということですよ、よろしいですか？

D テーブル：積み上げて行く・・・て、いうのですかね。

木村：積み上げる、はい。その感覚が大切だということですね。

D テーブル：だから与えられたものだったら不満しか出てこないのではないかしら、あしてもらいたいとかこうしてもらいたいとか、あれが足りないとか、アンケートの調査を見ましたら、素晴らしかったというものはあまり出てなかったような気がします。あしてもらいたいこうしてもらいたい、お金が足りないとかそういうふうな感じのボランティア調査であったと思うし、今日の午前中の結果のデータもそういうふうなデータだったような気がいたしておりますが、まだ詳しいことはわかりません。

木村；はい、ありがとうございます。一つの視点として投げかけを頂きました。次の方どうぞ。

E テーブル：さっきボランティアとアルバイトとの話が出ていましたが、もう一つ市民活動というものがあるのではないかと思います。市民活動から出発して、それが形としてはボランティア活動としてやっているのですけれど、市民活動もあると思っています。これは自分達がやりたいことをやろうと、さきほど発言された女性の方も最初からボランティアという気持ちではなかったと思うのです。やりたいことをやっていらっしやった、それがボランティアで、そしてやがては市の方も認めて助成を出しましょうか、じゃないでしょうか。やはり私たちがやりたいことを何かやっといこうと活動を始める。

木村；それが市民活動ですね。

E テーブル：ですからそれをボランティアだとひっくるめてしまうのが問題で、形としてはボランティアやっているのですが、市民活動として・・・。そこには意外とやりがいがあると思うのですね、自分達が始めたから。そういう全部をボランティアにしてしまわなくてもいいのかもしれないという気がします。

木村；ありがとうございます。市民活動という部分も出てきましたね。これは自分達がやりたいことを自分達で始めるということが市民活動とボランティアを分けるものではないかと。それが先ほどの自分達でお金を出すという、自分達からするということと繋がっていった、僕もなんだか難しくなってきました。この議論を続けていっても構いません、自分の感じたことを言って頂いても構いません。この様な形でお願いします。

F テーブル：市民活動という名称がでてきたことはすごくスッキリ頭の中が整理できたような気がします。結局最初の方の疑問の中で、地域の中で自然発生的に、例えば歴史が好きだから歴史の好きな仲間が集まって、そのうち「じゃあこれをいろいろな人に伝えるガイドにしよう」ということでボランティアに発展していく、そういった形と、行政が募集するボランティアというのはやはり質で違う部分が多いと思います。

今日いろいろな話を皆さんからお聞きし、その市民活動とボランティアっていう名目でスッキリしましたが、結局既存のボランティア、市民活動自然発生的にできたものは、目的意識が共有されているからやり甲斐が凄くあるのだろうなと思いました。ただ行政が用意したボランティアに関しては、入り口の部分がしっかりしていないと目的意識が共有できず結局をやり甲斐を感じられず、唯やらされているだけのものになってしまい、アルバイトかボランティアの区別が付かないようなものになってしまうのかなという感じがしました。

木村：ありがとうございます。目的意識という言葉を感じきの中で出していただきました。市民活動の中で目的意識があると自立的で長続きするかもしれません。そこから自然にやり甲斐が生まれてくるのだろうと思います。ただボランティアの中には行政や他の人からお願いされて目的意識が無いまま活動しているものもあります。そうするとだんだんボランティアに必要なやりがいが無くなってきて、アルバイトのように本質的なものを失ってしまう。大事なものは目的意識ではないか、そういうことを言ってくださいました。ありがとうございました。

G テーブル：今日の感想ですが、私たちの仲間も次の世代即ち後継者、若い人たちへどう繋ぐかということについて、結構議論します。最初の話に、子ども達を巻き込んだらいいという意見が出ていましたが、私たちも後ろの壁に掲示しているウェルカムボードを作って「12の月の物語」というイベントに取り組みました。やっぱり私たちだけじゃなくて次の世代へ引き継ぐとしたら子ども達よね、ということで今年の夏は子供達を呼んでケン作りやウェルカムボード作りをしました。

今日参加して古賀さんとお話しスッキリしました。それは、後継者をどう作るかという話になった時、やっぱり私たちは最初に立ち上げたので、本当にワクワクドキドキしながらそれを楽しみに、やり甲斐というか、やりたいことをやってきた、そういうグループの集まりだった訳です。

仮に若い人たちのグループがボランティアを立ち上げたとしても、じゃあ私たちがそこに入るかといったらそうでもない。スッパリした事とは、「こういうことをしている仲間とこの地域で、私たちはこういった拘りをもってやっているよ」と、「自分達がやりたいことをやり続けること、それでいいのかな」というふうに気付いて、今日は少し安心しました。若い誰かに繋げなきゃいけないとか、誰か探さなければとか後継者に拘わらなくてもいいのかなという思いが、古賀さんとの話で一つ落ちました。すごく楽になったような気がします。

私も子育てボランティアをやっており、小さい乳幼児のママ達のボランティアです。ここも10年も経つと私が一番若い位で、70代の人達もいますが、若いボランティアをどう育てるかという議論になります。しかしそうではなくて、地域には「自分達が好きなことを、本当に楽しそうにやっているおばさん達がいるよね」ということでいいのかなと思いました。

今日は若い方達もいらっしゃいますが、本当にボランティアというか自分のやりかたで、仕事以外のことを見つけている人たちが地域にたくさん立ち上がっていくことが大切だと思いました。本日はすごい収穫で帰ります。ありがとうございます。

木村：ありがとうございました。

H テーブル：先ほど目的意識の話や好きなことをするという話が出ておりましたが、私の学生生活の中での経験を踏まえて、少しお話しをしたいと思います。

私は大学3年生の時から大学の体験学習という授業の一環で、企業がやっている社会貢献活動、食育関係ですが、「親子ラーメン作り教室」というものがありまして、その中でボランティアスタッフとしての活動を1年半続けてきました。今はちょっと活動が止まっています。実は社員の方と結構もめて喧嘩になりました。ボランティアについての考え方が全然違って揉めるという経験です。今活動が出来ない状態で、その経験から「ボランティアって何なのだろう」という問いが生れ、今日はこの場に参加しています。

先ほど目的意識が大事という話が出ましたが、私も本当に目的意識がボランティアを続けていく上ですごく大事な物なのではないかと思っています。

というのは私自身、ボランティア活動の中で、社員の方に「この事業をやっている目的は何ですか」と聞いた時にすごくシーンとなって、「目的・・・無いみたい」と言われました。ボランティアのスタッフを増やしたいと普段から言っているその本人が目的意識を持っていないということに私は、すごく納得がいなくて、プロ意識をもって仕事をしたいと普段言っている方だったので、プロ意識っていうのなら目的はすごく大事なのではないかという想いを伝えました。

その企業は、学生ボランティアを沢山募集しているのですが、続かなくて辞めていく学生が多いという実状がありました。その結果からもわかると思うのですが、何のためにやるのか、その想いに人はついて行くと思います。何のためにやるかという想いをもって

る人や、好きなことをやっている人には、言葉にも力が入ってきますし実際生き生きとして活動されていると思います。人の心を動かして、ああ自分もここで何か一緒にやってみたいと思うのですね。

そこで先ほどから話がありましたが、「若い世代をどう取り込むか」などあまり考えずとも、自分達自身がどう目的意識をもって、どう生き生きと好きなことをやるかということが一番大事だと思いました。それがないところはやはり続かないし、逆にそれがあるところは自然と人が集まって続いていくのだろうなということを強く感じています。今日は大変勉強になりました。ありがとうございます。

木村：ありがとうございます。切実に思っていることを出してくれたこと感謝します。他の方いかがでしょう。ワールドカフェで話したことそのまま持ち出していただけたらと思っています。

Iテーブル：行政という立場です。最初のお題で「ボランティア活動していますか？」と聞かれましたが、文化系のボランティア活動はあまりしたことはありません。文化行政に携わっているのこれからやろうかな、と思いながら話を聞いていました。

行政の立場で特に感じたことは今言われていたように、ボランティア活動でどうしていいかわからない時、ボランティアコーディネーターという資格があると聞いています。上手くいっている所そうでない所、いろいろなボランティア団体活動がありますので、そういった活動の仕組みを上手く作るボランティアコーディネーターの方が増えていくといいのかなということを感じました。ボランティアの人がどうしたらいいのか判らないことについて、ボランティアコーディネーターの方が間に入って、ボランティアの方に伝える。今朝、井上先生の話でもありましたけど、協働して同じ立場で相手の方を思って作り上げていくことが必要なのかなと思いました。そこでそのような環境づくりを今後の活動に活かすということ、私達行政はそういう環境づくりが必要ではないかということを非常に、感じました。

木村：ありがとうございます。行政のかたで、環境づくりということに対してコメントいただきました。ボランティアコーディネーターという資格がありますよ、今は少ないけれども「ボランティア活動、どうしたら良い？」て、いう悩みに答えられる存在だと思うので、そういったものが増えていけばいい、行政としてはボランティアコーディネーターさんが増えていけるような環境づくりをこれからやっていきたいという、これは宣言というふうに捉えてもよろしいですか？

Iテーブル：想いとして、です！

木村：想いとして、ありがとうございました。想いを語っていただきました。ではどうでしょうか。その他の想いを、お願いします。

Jテーブル: 今日初めてこのフォーラムに参加して率直に思ったことですが、いろいろな職業、幅広い年齢層の方と話をし、自分のボランティア観というのがすごく凝り固まっていたな、ということに気付かされました。一概に若者を受け入れるとか、後継者を作らなければとか言っても、その活動を本当に続けていく意味があるのか、場所によっては新しい人を受け入れなくても退職された方がどんどん継いでいくという在り方もあるし、ボランティア 一つ取ってもいろいろな在り方、やりかたがあって、自由なのだなということを感じました。広い視野と考え方をもってボランティアというものを見つめなおしてこれから繋げていきたいと思っています。ありがとうございます。

木村: いろんな年代、いろんな立場の人と話すことで自分のボランティア観、というのが凝り固まっていたのだなということに気付かれ、何か新しく開けた、というコメントを寄せていただきました。ありがとうございます。

本当にいろいろなことがこのフォーラムのワールドカフェで話されていたのだと思います。少しだけ今のところの流れを整理すると、まずお客様から感謝されることが心を動かすことに繋がっているという感想、それから世代交代についての課題ですね。子どもとボランティアをすることで彼らが成長しボランティアの担い手になる、若い世代とは子供ではないのかという気づき。また一方若い世代をどう取り込むかというふうに考えていたけれども、古賀さんとお話をして「繋げなくてはいけない」ということが拘わりなのではないかと。この拘わりから自由になった時にスッキリしたという話。

それからボランティアとはそもそも何かという、とても深い々問いも出ています。それを比較するためにアルバイトとか市民活動という言葉もでてきました。そこでキーワードとして出てきたのが“目的意識”だと思います。目的意識があればそれが活動している人にとっては“やりがい”となります。また目的意識があると何故それをやるのかという言葉に力があり、その言葉に対して自然と人が集まってくる。一方、目的意識が無いと共有できないその為に長続きしない。そういった抱えている切実な問題の中から意見を言ってもらいました。それから環境づくりのことも話されました。ボランティアコーディネーターという仕組みがある。今は無いけれどもこれから増えていけばいいので、こういった環境づくりをしたいという思いを語ってくださいました。それから多様な人と語ることで自分のボランティア観が凝り固まっていたということに気がついたという感想を投げ込んでいただきました。ありがとうございます。これがまず私たちのこのワールドカフェで話されていた全体の形ですね。これに対して本当に多くの人が言葉を重ねているので実際はもっともっとあると思いますが、先ずはこれをもって私たちが今日話した全体図というふうにしたいと思います。

ここで古賀さんにコメントを頂きたいと思います。古賀さんは文化・芸術や人材育成といった領域で活動されています、その流れからコメントいただければと思います。

○コメンテーターのとりまとめ

アートサポートふくおか 代表 古賀弥生氏

フォーラムを振り返り、専門家の立場からコメントをお願いします。

先程からとても難しい「ボランティアとは何だろう」という話も出ていました。皆さんがボランティア活動に関わっていく上での課題をどう解決していったらいいのか、そのような話が沢山出てくるのかと私は思っていました。もちろんその話も出ていましたが時間の余裕もありありませんので「ボランティアとは何だろう」という根本的なところからお話していきたいと思います。

まず、文化ボランティアという話ですが、活動自体は多分 30 年ぐらい前からいろいろな所で行われていたと思います。文化ボランティアという名称自体はこの 10 年ぐらいです。日本で広まったのは心理学者として有名な河合隼雄さんが文化庁長官になられたのが 2002 年ですが、2003 年から文化庁の事業として文化ボランティアを推進することになりました。だから 10 年ぐらいになります。この 10 年ぐらいの間に国の施策として文化ボランティアを進めていきましょう、といろいろなところで行われている文化に関わるボランティア活動に文化ボランティアという冠がつけられた訳です。

そのような経緯で概念としては漠然としたままで進んできている感があります。河合さん自身が文化ボランティアとはどういうものかとおっしゃっているのは、とてもぼんやりした定義になっていまして、確か「自らが文化を楽しむと共に、他の人が文化を楽しむことをお手伝いする活動」ちょっと文言が違うかもしれませんが、意味合いとしてはそのように、ある本の中でおっしゃっています。

具体的な仕事でいえば、コンサートの時に駐車場整理やもぎりをするとか、当日だけお手伝いできることもあれば、コンサート自体の企画運営とか、もっといえばそういう企画運営ができる団体を継続的に運営していくことまで含まれます。すごく幅広いことだと思います。ですから話の中で市民活動という言葉が出ていましたが、市民活動団体は N P O ともいいですけども、N P O 活動とボランティア活動っていうのは延長線上にあるものではないかと思います。そういうものまで含まれていて一人一人がちょっと今日は時間があるからボランティアをしてみようかしら、「チョボラ」とか言いますね。「ちょこっとボランティア」の意味です。

一時期、少しだけマスコミが取り上げて、「流行るかな」と思ったら流行りませんでしたけれども、チョボラの方と、志があって社会の中で自分達が大切だと思っていることを実現する為に長く活動して社会を変えていくところまでやっていきたいと思っている方と、すごく幅がある内容が文化ボランティアあるいはボランティアという言葉の中に含まれています。そもそも現在の文化ボランティアという概念の中には幅広いものが含まれたままで話が進んでいます。

今日おいでになっている皆さんお分かりの通り、ボランティア活動をしていらっしゃる方と、やっていただく立場の施設の方や行政の方もいらっしゃいます。もしかしたら個別に、

どこの団体にも所属していないが興味があって来ているという個人の方もいらっしゃるの
で、関心があればどこかの団体の活動に今日は行ってみようかな、という方もおられるか
もしれないし、きちんと自分の団体を作ってこれが大事だからうちの地域でこれをやりた
いと思い活動していらっしゃる方もいるかもしれません。

本日多様な方が混ざり合ってテーブルについておられる状況はまさに文化ボランティア
の現状をそのまま再現しているのがこの会場の様子だと思います。

ですから概念がまだまだ整理できていないのはある意味仕方が無いというか、この10年
の取り組みなので、これから一緒に考えていかねばならないと思います。そもそも「ボラ
ンティアとは何か」というところで、例えばアルバイトと比較してどうなのかというお話
がでていましたが、これはどちらかというボランティアをお願いする側の方から見ると、
この比較はかなり意味が深いと思います。

というのはボランティアの方に何故仕事ををお願いするのか、施設や行政の方の立場で考え
た時に、「安い人手」という捉え方をされたら、ボランティアする側の方は面白くないのが
当然ですね。でもお願いする側の方にとって、じゃあアルバイトではなくボランティアさ
んをお願いする意味は何なの？ここが実はすごく難しいことです。

平成18年度に文化庁が文化ボランティア実態調査をしました。その調査の中に出て
きた「文化ボランティアをなぜやるのか」「なぜやりたいと思ったのか」という結果が、私
の記憶ですが上位にランクされた理由が、まず「自分が好きだから文化や芸術に触れたい」
これが確か1位でした。「文化や芸術に触れたい、だから文化ボランティアをやる」あとは
順不同ですけど、「自分自身が成長したいから」、それから「社会と繋がりたい、社会貢献
をしたい」もう一つ近いかもしれないけど、「人ともっと知り合いたい」というような理由
が上っていました。この理由をひっくり返すと実際にやってみて満足を得られたことは何
かという問いの答えも順位が入れ替わったりしますが同じなのです。文化に触れることと
仲間を増やすこと、自己成長ですね。それから社会貢献、社会とのつながり。という4つ
ぐらいが上位にくる回答になっています。始めた動機もこれだし、実際にやってみて得ら
れた点、満足した点というのもこれなのです。

これをボランティアさんに仕事ををお願いする立場の方から見たときに、アルバイトさんだ
ったら自給いくらだから自給分は働いてくださいと言えるわけです。ところがボランティ
アさんは報酬が欲しくて来ているわけではないので、お金もらえたらうれしいかもしれま
せんがそれは置いといて、何かを得たいと思ってきていらっしゃるのであれば、その何か
を提供できているか否かということを考えなければいけないので、アルバイトよりもはる
かにマネジメントが難しいのです。お願いする側の方にはボランティアマネジメントとい
う専門的な知識が必要ではないかと私は思っています。

予算がないから人手が足りないからここはボランティアで、という考え方だと既にみな
さんのお話しの中に出てきたように喧嘩になったというところに行きかねないものを含ん
でいるのです。これはお願いする側の方にとっては、アルバイトと比較して何故あえてボ
ランティアさんをお願いするのかという目的意識をきちんと持つべきだと思います。目的

意識、これはとても重要なことです。ボランティアをやりたい方はある意味目的意識をわりと持っていらっしゃいます。人と繋がりたいとかいろいろもっていらっしゃるけど、お願いする側の意識がその辺を踏まえたものになっているかどうかそこがとても重要です。

今日、中込さんのお話で、直方谷尾美術館ではボランティアさんに協力していただいているのはけして人手が足りないからではなく、「地域と美術館をボランティアさんが繋いでくださっているのだ」と云うとても素敵な言葉を頂きました。そこが直方谷尾美術館にとってボランティアさんにご一緒することの目的ですね。目的がはっきりしていればボランティアさんとの関係を作っていくこともきっと上手くいくと思いました。その直方谷尾美術館の意識がどの文化ボランティアの領域においても全部通じるか否かはわかりませんが、皆さんがボランティアの方達と関わる場合、ご自身で文化ボランティアさんにご一緒する意味を明確にさせる必要があるのかなという気がします。

それと実際に活動しているボランティア団体の方にとってはやはりマネジメントの面でいろいろと難しい課題があるということが各テーブルで出ていたと思います。福岡市東区の奈多でご活動されている奈多仲間作り「だぶ」さん、スッキリしていただいてありがとうございます。もともと活動を始められた動機を先ほど伺いましたら、地域にスポーツ関係の活動は結構あるが文化関係の活動が少ない、いや、「ない」と断言されましたね。文化関係の活動がないから私たちがやろう、ということで立ち上げられたのですが、団体の高齢化とか世代交代のお話がでたときに私が申し上げたことを少し補足してお話しします。

地域に文化の活動がもっと必要だという目的であり、その趣旨を継いでくれる人がいれば、なにも「だぶ」さんが未来永劫継続しなくてもいいのではないかと私はちょっと思ったのです。大事なことは「だぶ」さんが活動を続けることなのか、それとも地域に文化活動が展開されていくことなのか何れなのか、団体によって考え方も違うと思うので、うちの団体を続けていくことが重要な目的ですとおっしゃるかたもいるかもしれないし、いわゆる「ミッション」といいますか、自分達の「使命」と思っていることを引き継いでくれる方さえいれば、絶対に自分の団体に若い人がいなければならないと考える必要はないと思いました。そういうことを申し上げたらスッキリしたといってくださいました。

世代交代ということを課題にあげられる団体は結構多くて、アンケートの結果でもそうだったと思います。去年か一昨年のフォーラムにも出ていましたが、ほんとに団体の高齢化はいけないのでしょうか。年齢があがるということが一概にいけないとも言えないのではないかとご指摘もあつたように記憶しています。ご高齢の方が比較的多い団体の活動趣旨に賛同できても若い世代の方が入りにくいのは当然ですよ。逆も当然でしょう。若いギャルママの会に高齢の方が、私も子育て経験ありますと言って行けるかと言えばやはり入れません。もし子育てが大切という意識があるとしたら、やはり同じぐらいの世代で同じ考え方をもっている人と、別な子育て系の団体を作ったりするかもしれません。それでいいのではないかと思います。活動の趣旨を継いでくれるような方達がいたら、その方達が新しい団体を作ることをサポートする、経験者として後見人みたいになっていくよ

うな育て方もあるのではないかと思います。いろいろまだ触れなかった点もありますが時間も押し迫っていますのでこれまでにさせて頂こうかと思います。

木村：ありがとうございます。

古賀さんの話を聞いて触発され、発言したいという方はいらっしゃるでしょうか。

A：実は最初に「ボランティアは何ぞや」というネタ振りをさせて頂いたのですが、私は行政の立場でボランティアの皆さんに関わっていく立場にいます。今年初めて赴任し自分にはまだ経験がありません。来年からボランティアを束ねていかななくてはならないというスタンスから悩みがあったのですが、今日は皆さんが考えていることをいろいろ伺わせて頂きありがとうございました。皆さんそういうふうと考えていらっしゃるのだという事がすごく伝わってきて安心しました。

今日のワールドカフェでは3回の席替えがあり私はホストの役になりました。最初こちら太宰府万葉の会の方から「ボランティアは何ぞや」という問題提起があって、自分もそうだと思い、そこを知りたいと思いました。一回目の席替えの時に、ボランティアに前向きな立場でいろいろと話し、そのあと逆に後ろ向きの感じで話してみて、皆さんどう反応するかを知りたく、ちょっと意地悪なホストだったわけです。そうしているうちに自分の中でどんどん判らなくなりました。要するに自分が今新しいボランティアの募集をかけているなかで、新しい方にどういう思いで向かい合ったら良いのか、その答えが今日少し見えてきたような気がします。

いま1つ自分が考えていることはあくまで行政が立ち上げるボランティアですけど、ボランティア目線で目的をしっかりとボランティアの皆さんと話し合い立ち上げていくプロセスを年度当初からやっていくことが第一歩かと思っています。もし来年また参加することがありましたら、今はこのような感じでやっていますという話ができればいいなと思っています。どうもありがとうございました。

古賀：ありがとうございました。来年、再来年はどうなっているか、聞いてみたいです。

木村：地域との関わりなどいったいどうなったのかと。ありがとうございました。

B：今、古賀さんがおっしゃったミッション、使命ですね。ボランティアを長く続けていくにはどうしてもこの理念とも言いますが、これがしっかりしていないとボランティア活動は続かない感じがします。だからお題目ではありませんが、徹底させていかないと挫折するような気がします。非常に大切なことではないかと思っています。団体でボランティア活動する時、なぜこういうことをするのかということを全員で共有出来ないと言長続きしにくいと思います。

今日は若い4名の女子大生がフォーラムに参加してくれました。ボランティアの赤裸々な悩み「ボランティアとは何だろう」ということを探してみたいということで参加された

そうです。このように若い方がボランティアを改めて実感したい、こういう気持ちに大変感動しています。ありがとうございました。

C: 若い世代をどう取り込むかということを常日頃、私共の代表は言っております。

このようなこともありました。例えば、観劇会を催します。子供のお母さんたちも感激して帰って行かれます。そこではアンケートをお願いしていますが、その中に「来年も参加できますか」という欄が必ず問いとして有ります。

「参加したい」と答えた若いお母さんがいたら、もうがっちり放しません。電話で連絡し、すぐ訪問して、「来年度もよろしく」といって、少しずつ増えていきます。若い人が子連れで来てくれます。それでこういう素晴らしいものもできました。やはり私たちの年代だけではできないことも若い人たちが、別に会員にならなくてもいいのです、こういうイベントに来てくれる人たちを集めるだけでもかなり力になるのです。だから単発でもいいから若い人が参加してくれることで、会の運営がとても活発になって元気になると思います。そういう取り入れ方は私たちの代表は結構上手です。

古賀: 若い人がたとえ会員にならなくても活動にいろいろな形で関わってくれることで既存のメンバーの活動も活性化していく、刺激を受けていくと思います。その刺激を求めて世代交代ということを課題として上げている方も多いと思います。今の取り組みの例は多くの方に参考になったのではないのでしょうか。ありがとうございました。